

第 3 回

市民まちづくり活動促進テーブル計画部会

会 議 録

平成 2 0 年 9 月 2 5 日 (木)
札幌市役所 6 階 北会議室

○事務局（秋川課長） おはようございます。

最初に、次回の開催日を打ち合わせしていただければと思います。

今回は、10月中旬で、答申に近い形のもの話し合っただくことになるかと思
います。

○河野部会長 皆様のご都合はいかがでしょう。

〔 次回部会の日程調整 〕

○河野部会長 ということで、20日が第1候補になります。

○岩見副部会長 きょうと同じ時間ですか。

○河野部会長 そうですね。午前中です。

○事務局（秋川課長） 場所はまだとれていませんので、後ほどご連絡差し上げたいと思
います。

ありがとうございました。

1. 開 会

○事務局（秋川課長） それでは、定刻になりましたので、よろしく願いいたします。

2. 議 事

○河野部会長 おはようございます。

きょうは、お忙しいところをお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

前回に続いて、市民まちづくり活動促進テーブル計画部会の第3回を始めさせていただ
きたいと思います。

きょうは、安田委員と岩尾委員のお2人が都合で出られないというお話を伺っています
ので、5人で進めたいと思っております。

それから、前回、傍聴席からご意見をいただいております。きょうはまだお見えにな
っていないようなのですが、その意見の取り扱いについて保留にしておりましたが、
意見シートを用意しました。これは、終了後に回収させていただいて、私たち委員にそれ
を見せていただいて、その上で協議をさせていただくと。意見について、そのままにしな
い形にするということですね。

これが意見シートです。

お話ししますが、簡単に書けるようなものになっております。

次の会議のときに、その意見の内容について協議させていただくことにしたいと思っ
ておりますけれども、皆様のご意見をお聞かせいただければと思います。

どうでしょうか。

傍聴ですから、会議の中には入ってこられないというのは基本だと思いますけれども、
意見をどうするかということですね。参考にさせていただくという意味では、皆さんでそ
の意見を拝見させていただいて、少しは意見交流をしながら、この会議の中に使えたり、

私たちの意見と共通項があったり、同意できるものがあれば、それは協議の中で入れ込んでいくといいますか、そういう協議をしたいということになると思いますが、よろしいでしょうか。

何かほかにご意見などがございましたら、ぜひお願いします。

○横江委員 役割として、傍聴人というのは、実際に現場を見て聞いてという立場ですが、なおかつ、こういった希望がありまして、シートによって受け入れ体制をとることになっていますから、それでよろしいと思います

それを加味して、検討するかどうかについては、委員会の判断によるということ、今の部会長のお話でよろしいかと思います。

○菅原委員 傍聴のことを気にし過ぎて、傍聴の意見が通るような話には持っていけないでほしいと思います。やはり、この会の中で参考にするくらいの気持ちであっていいだろうと思います。

○河野部会長 あくまでも傍聴人ということですから、そこはルールとして守っていただくことにしたいと思いますので、またご協力をよろしくお願ひしたいと思います。

よろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○河野部会長 それでは、意見シートに書いていただいて、それを参考に取扱っていくということで同意をいただきましたので、その旨、よろしくお願ひしたいと思います。

それでは、皆様のお手元にあります会議次第に沿っていきたいと思います。

きょうは、大きな柱立ては議題3になるわけですけれども、最初に事務局の方から議題2のご報告をいただいて、それから3に行きたいと思います。

よろしくお願ひします。

○事務局(秋川課長) 市民活動促進担当の秋川です。よろしくお願ひいたします。

まず、さぼ一とほっと基金ですけれども、現在、2,877万円の募金が集まっておりまして、3,000万円近くなっております。

総額約178万円の助成事業の募集を行ってきたところですが、募集事業は9月17日に締め切りいたしました。各団体からしり上がりに応募が来まして、34団体の応募がございます。

内訳で見ますと、福祉分野が15団体、地域の安全が4団体、地域のきずな、テーマです、それが15団体という内訳で募集の申し込みが来ております。

これに関しては、10月1日に書類審査を行いまして、10月25日に公開プレゼンテーションということで、団体の方に事業の概要を説明いただいた上で審査を行いまして、助成先を決定するというスケジュールになっています。

以上がさぼ一とほっと基金の状況でございます。

それから、基本計画についてですけれども、促進テーブルでご議論いただいておりますが、9月27日の土曜日に、市民のご意見をいただくということで、ワークショップを予

定しております。1時から4時まで、エルプラザで行う予定でございます。

それから、庁内的には、市の職員の意見も聞いてみようということで、10月10日に職員へのワークショップも予定している次第でございます。

これが基本計画に関する主な動きでございます。

それから、フェスティバルです。市民活動団体と市民が気軽に出会える場、それぞれがつながりを持つきっかけになればということで企画しているお祭りですけれども、10月5日に予定しております。市長とタレントの森崎さんとの対談等を行う予定でございます。

前回からの経過報告ということでお話しさせていただきました。

以上でございます。

○河野部会長 ありがとうございます。

皆さんの方からご質問等はございますか。

9月27日のまちづくりワークショップは、委員の中で出席予定の方はいますか。

○横江委員 私は行きます。

○河野部会長 横江委員は行かれるのですね。

菅原委員もですね。

○菅原委員 2人、連れてまいります。

○河野部会長 ありがとうございます。

なるべく多くの方に声をかけて参加していただくようお願いしたいと思います。

それでは、報告についてはよろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○河野部会長 それでは、きょうの大きな協議テーマであります3番目に行きたいと思えます。

基本計画の全体骨格及びまちづくり活動を取り巻く課題に対応した解決方策についてということで、前回もそれぞれお話をいただきました。それについて、事務局で、私たちの意見も含めてまとめていただいたようですので、最初に事務局からご説明をいただいて、その上で協議に入っていきたいと思っております。

よろしくお願ひしたいと思います。

○事務局(大瀬係長) それでは、私の方から資料の説明をさせていただきたいと思えます。

まず最初に、基本計画のイメージというA4判の2枚つづりの紙をごらんいただきたいと思えます。

第2回目の計画部会するときにも計画全体の骨子をご提示させていただきましたけれども、今回、改めて、前回のご意見を踏まえまして構成をちょっと変えてございます。

大きく変えた部分は、第6章、第7章、第8章の三つの章立ての部分でございます。

6番目の計画の基本目標というところでございますけれども、前回の案でいきますと、一番最初に協働のあり方ということで協働が出てきまして、それぞれ細かい項目が羅列さ

れているような感じでありました。それを、今回、まちづくり活動の参加から、だんだん活動の深化といいますか、発展といいますか、そのプロセスを踏まえた章立てに編成しております。1番目が多くの方によるまちづくりへの参加、2番目が市民まちづくり活動の充実、3番目が連携の活発化、4番目が地域力の強化、それが全体的に相まって5番目に支え合うまちづくりの札幌スタイルの創造というプロセスを踏まえた章立てに構成しております。

これに基づきまして、それぞれ第Ⅶ章、第Ⅷ章の施策の方針、基本施策も連動するような形の構成にしております。

特に、第Ⅶ章の施策の方針につきましては、前回の案では情報、人材、活動の場、財政の四つの支援策に分けてそれぞれ構成しておりましたけれども、既存の事業も四つの支援に当てはめる作業をする中で、この四つの支援にはまり切らないものが結構ございまして、それぞれの支援策にまたがるような事業なども多々ございました。そういったことも踏まえて構成を変えてございます。

次の8番目の基本施策の部分ですけれども、後ほどA3判の資料で再度説明しますが、基本的には参加する市民、もちろん参加しない市民も含めてですけれども、市民に向けた施策というくくりです。2番目に活動する団体に向けた施策、3番目に連携促進に向けた施策、大きくこの三つの柱に絞って、それぞれ細かい項目をつけてございます。

全体的な計画のイメージとしては、今、そういう形で考えているところでございます。

次に、資料の二つ目の議事録の要旨をごらんいただきたいと思います。

前回いただいたご意見につきまして、議事録の要旨ということである程度整理させていただきましてまとめた資料でございます。

まず最初に人材の育成、コーディネーターの育成ということですが、前回、この部分で非常にたくさんのご意見がありました。人材の育成につきましては、札幌市の各部署でも講座研修事業が行われておりますけれども、講座が一たん終わってそれで区切りになるという形ではなくて、その参加者が地域の活動につながる、あるいは、学習した成果が活用されるといったつながりが必要ではないかというご意見が前回ございました。

また、市内でいろいろなプログラムが行われている中で、類似する講座もあるだろう、あるいは、お互いに関連するような講座事業もあるだろうということで、その全体をくくするような体系化も必要ではないかというご意見がございました。

また、市民と職員の学び合いの場という設定があってもいいのではないかというご意見がありました。

あるいは、団塊の世代向けに特に気軽に楽しみながら参加できるような機会が必要ではないかというご意見がございました。

次に、コーディネーターの育成ということでいきますと、コーディネーターといいますが、いろいろなコーディネーターがいらっしゃるわけですが、基本的には人と人を結ぶ役割を持っているということでございます。

また、各分野のコーディネーターに共通する技術なりノウハウなりを学ぶような講座、一つの統一的な講座があってもいいのではないかというご意見もございました。

また、コーディネーターと申しまして、非常に専門的な力量が要りますので、そういった長期的なプログラムで養成を図るような事業があってもいいのではないかということもでございます。

また、コーディネーターと直接の結びつきは薄いかもしれませんが、まちづくりへの企業の参加の促進という範疇の中で、企業がコーディネーターとして活動するとか、企業のノウハウの導入とか、そういったものがあるのではないかというご意見がございました。

また、コーディネーターが育成された後の話でございますけれども、地域活動への橋渡しも非常に重要というご意見がございました。

次のページです。

地域においてまちづくりセンターの役割も、現在でもコーディネーターとして役割を果たしておりますけれども、依然としてそういう役割が重要だというご意見がございました。

また、次の項目でございますが、市民の参加ということでございますと、まちづくりの参加者をふやすということが非常に大きな課題であるというご意見ですけれども、そのためのきっかけ事業、特に、敷居を低くして、まちづくりのおもしろさや魅力を発見できるような事業が必要だというご意見がございました。

また、そもそもまちづくりへの参加を募るためには、活動団体自体が広報力を向上させるようなことが非常に大切だということで、広報力向上のための取り組みが必要だというご意見がございました。

また、いろいろな形で参加したいという市民の方がいらっしゃるという、実際にアンケート調査でもボランティア活動なり社会参加をしたいという志を持っている方がいっぱいいらっしゃるということなので、そういう方が気軽にできるようなボランティアのメニューを提示するような仕掛けづくりが必要だというご意見や、地域での活動、あるいはテーマ別の活動というさまざまな活動の情報提供が必要だというご意見がございました。

また、団塊の世代向けの新たな活動のステージというご意見ですけれども、従前の地域活動、ボランティア活動にプラスアルファして、次代に向けた新たな活動のステージを設けるような工夫も必要だというご意見がございました。

また、初めてまちづくり活動をする方にとっては、楽しみながらというのが長続きの秘訣、かぎだというご意見がございました。

また、次の活動を支援する施設ということでは、サポートセンター的な機能を有したものが地域にあり、そういうものがコーディネート機能を果たすことが必要ではないというご意見がございました。

また、連携協働の項目につきましては、協働の担当窓口が必要だというご意見とか、次のページに行きますと、NPOと企業のマッチングを担う窓口です。今現在も私どもの協

働推進担当課がございますけれども、そういった窓口の有効性、あるいは、次のお話でいきますと、協働事業ということで、従来は行政からNPOが委託を受けてやる事業があるわけですが、そこから一歩進んで、対等な立場で事業を進めていく、そして、ある程度の権限をNPOにゆだねるようなものがあるのもいいのではないかというご意見がございました。

また、そこから発展しまして、市民が主体的に運営する組織が生まれてくるということが非常に望ましい、それを促進する働きかけが大事だというご意見がございました。

全体に渡るご意見ですが、市民がまちづくり活動の重要性を理解して、参加に至って、お互いに連携し合いながら活動を継続化させていくというプロセス、それを踏まえた基本計画のあり方、あるいは、支援のあり方が求められるというご意見がございました。

また、先ほどの人材の育成、コーディネーターと並んで非常に大事な視点でございますけれども、地域のサロンということでございます。

今現在も、シニアサロン、子育てサロンがございますけれども、それとプラスアルファ、新しいサロンの展開ということで、いろいろな方々が自由に集える場であるというサロンが非常に大切だということです。また、そういったサロンを拠点にしまして、札幌の未来を展望したり、ビジネス展開につながるような場である新たな可能性がサロンの中にあるのではないかというご意見がございました。

また、まちづくりの参加ということでいきますと、子どもの参加が非常に大事だということでございます。子どもが参加すれば、それに付随して大人もともに参加し、それが地域全体に広がるきっかけになるのではないかというご意見がございました。

また、ご意見の最後ですが、わかりやすい計画づくりが必要に大切だということです。一つは市民目線ということで、もう一つは、ダイジェスト版をつくって、そこで計画のポイントを示して、わかりやすい、親しみやすい計画をつくるのが大事だというご意見がございました。

前回、そういうご意見がいろいろ出されました。

次の資料ですが、これは、今回、議論の中心になる資料かと思えます。A3判横長のカラーの資料でございます。

ただいま説明しました全体の基本計画のイメージ及び前回の第2回計画部会でのご意見を全部集約したのがこの資料です。

時間も限られているので、ポイントだけを説明したいと思います。

基本計画の骨格（案）ということでございますけれども、この骨格（案）は、大きく二つにカテゴリーを分けております。

一番左から説明しますと、参加する市民の側からの視点と、もう一つは活動する団体の側からの視点というふうに大きく二つに分けております。

参加する市民の側からは、基本目標としては、多くの市民によるまちづくりへの参加ということでございます。

そこに①から④まで四つの小項目がぶら下がっております。まちづくりへの多くの市民の参加、多様な参加のスタイル、気軽に楽しみながらの参加、市民と団体がつながるとい
う視点でございます。

それに基づきまして、施策の方針を真ん中辺に書いております。

そういうまちづくりに参加できる環境づくりという方針でございます、そこに小項目
が①から④までございます。これがそれぞれ基本目標の①から④に対応している形ござ
います。

また、それに対応した形で右側の基本施策でございますけれども、1) から5) まであ
りまして、効果的な情報提供、テーマ別の情報、気軽にできるボランティア情報、団体み
ずからの市民向けのPRへの支援ということで、団体の広報力の向上のための講座の取り
組みとか、団体が行う情報発信の手助けということを書いております。

また、3) 番目に、市民がまちづくりに関心を持つことができる取り組みの実施という
ことで、きっかけ事業とか、気軽に参加できるボランティア活動の仕掛けとか、団塊の世
代向けの新たな活動のステージづくりとか、子どもが参加できる事業、体験型学習事業と
いうことを書いております。

また、市民と団体が出会い、交流できる取り組みとか、交流サロンの活発化という基本
施策を書いております。

それから、団体の側からのところですが、この基本目標は大きく二つに分けてお
ります。市民まちづくり活動の充実、団体間の連携活発化というカテゴリーでございます。

それぞれ小項目で、活動の活発化、担い手の叢生というのはちょっとわかりづらいです
が、担い手がふえていくということです。企業の社会貢献活動の広がりということでござ
います。また、団体間の連携につきましても、団体間の連携によるまちづくりへの相乗的
効果の産出、市民参加の促進、市民まちづくり活動と行政の連携、コーディネーターの創
出ということでございます。

それぞれに施策の方針がぶら下がっておりまして、情報の支援から始まって、活動の場、
財政的な支援、人材の総合的・段階的な育成支援、企業市民活動の普及・促進です。連携
のところに行きますと、各主体間の連携の促進（交流、連携の機会の設定など）、市民協
働の促進。そして、連携を全部ひっくるめた形ですが、重層的な市民まちづくりネ
ットワークを目指してということでございます。

これも、それぞれ対応した基本施策がちりばめられております。

説明が前後しますけれども、白抜きの丸でかいている部分が、前回、基本計画でいた
だご意見そのものを入れさせていただいております。それに、黄色の網かけになってい
るところが、事務局の方で考えて表題をつけさせていただいた部分でございます。

まちづくり活動の充実というところでいきますと、一番上の総合的な情報発信とか、施
設の有効活用とか、さぼーとほっと基金のメニューの多様化という部分は、まだ黄色の網
かけのままですから、まだご意見をいただいている部分でございます。

また、その下の人材育成の部分は、前回、非常にたくさんの意見をいただいておりますので、全部で四つのご意見をここに載せさせていただいております。

また、③番目の企業の社会貢献活動の促進、諸施策の実施ということでいきますと、まちづくりへの企業の参加促進ということです。その下の団体間の連携のところに行きますと、それぞれITを活用した情報交換とか、お互いに出会い、交流する場などの促進とか、各種イベントでのまちづくり活動のPR、市民が団体の活動に体験的に触れられる機会ということで、ここはまだご意見をいただいている部分でございます。

また、次の団体間、団体と行政の協働事例の普及ということで、ここは二つのご意見がありますけれども、協働事業の実施、市民が主体的に運営していく組織創出の促進です。

③番目の重層的なまちづくりネットワーク形成の環境づくりというところで行きますと、地域におけるまちづくりコーディネート機能の拡充、協働の担当窓口の設置ということです。

最後の計画の推進に当たりというところは、こういったいろいろな諸施策を下支えする一つの基盤づくりということでありまして、職員の意識醸成ということでいくと、市民と職員が学び合う場、関係部局間の連携、まちセンの活用ということが上げられております。

最後に、計画の進行管理、検証、結果のフィードバックの実施ということでございます。

そういう形で、それぞれまちづくりの参加に至るプロセスに応じて章立てを再構成して、そこに施策をぶら下げているという全体的な構成を今現在は考えております。

きょうは、まだいただいている部分のご意見、あるいは、前回いただいたご意見をさらに膨らませるとか具体的に言っていただくということをお願いしたいと思います。

最後の資料でございますけれども、きょうご欠席している安田委員のご意見です。ぜひ、皆さんにお伝えいただきたいということで承っておりますので、私の方で簡単にメモで整理いたしました。

まず、安田委員からいただいている部分としましては、市民参加ということでいくと、団塊の世代が非常に大事だということでした。安田委員も、今、いろいろな形で団塊の世代向けの講座とかまちづくりのワークショップに取り組む中で感じているということでございます。

まず、団塊の世代がまちづくりに参加する動機の中で、リタイアした後に自分の人生をどうするかということで、仲間づくりとか、知り合いをつくりたいとか、そういった人間関係の比重が非常に大きいと感じているということでございます。

また、第2の人生ということでいきますと、団塊の世代のまちづくりへの参加のスタイルの中で、夫婦での参加ということが非常にふえているということでございます。子どもが大きくなり、夫婦の暮らしを見直す中で、まちづくりへの参加ということが一つ出てきているということでございます。

また、シニアの参加ということでいきますと、やはり、身近に自分が住んでいる地域の中での参加が望ましいのではないかとということでございます。そこでいろいろ活動する中

で、いろいろな方と顔見知りになっていって、そこから子どもの見守りとかいろいろな活動に波及することになり、活動の輪が広がっていくことが期待されるのではないかというご意見でございます。

また、団塊の世代に限らず、まちづくりへの参加がなかなか進まないところも一部ございますけれども、その原因としては、まず一つはニーズにマッチする情報がなかなかないということです。あとは、まちづくりの活動の輪が、実際にはいろいろあるのですけれども、どういう場があるのかなかなか知らないという情報面での大きな要因があると考えられるということでございます。

また、市民がまちづくりへ参加する段階をたどるとこういうことなのではないかということでご意見をいただいたのが、この二等辺三角形でございます。

最初は気軽な参加あるいはサークル的な趣味的な参加という活動があって、そこからだんだんまちづくりに深まっていくような参加、活動の継続化、あるいは、活動団体に所属して会員として参加していくということです。そこから、経験、キャリアを積んでいって、活動のリーダー、あるいは、団体の経営者になっていくという一連の流れ、プロセスがあるということです。きょう、A3判で説明したプロセスと一致する部分でございますけれども、こういうことを踏まえた施策を考える必要があるというご意見をいただいております。

それから、地域のサロンということです。

一つは、現実的な問題として、サロンの場所の確保と運営が大変だということでございます。

二つ目は、子育てサロンが各地にございますけれども、現在は女性が中心になって運営されています。その中で、男性の参加がすごく求められていて、現実に男性の参加があった子育てサロンでは、その男性の参加者が子どもから非常に人気者になったり、ノウハウが非常に生かされているということでございます。例えば、シニアサロンのように、逆に高齢者の男性が中心となっているサロンとの連携とか、シニアが児童会館のボランティア、子育てサロンも含めてそういう場で活動する道が考えられてもいいのではないかと。あるいは、区の高齢者大学、老人大学の受講者とか卒業生を地域のサロンなりにつなげていくことも非常に有効ではないかというご意見がございました。

また、最後の活動の場でいきますと、団体としては、ちょっとした打ち合わせの場とか情報交換ができるような身近に集まれる場が非常にニーズが高いというご意見をいただいております。

きょうの議論の参考にしていただければと考えております。

私の説明は以上でございます。

○河野部会長 ありがとうございます。

非常に膨大な資料ですので、理解するにはなかなか厳しいところがあるのですけれども、一つずつ皆さんの意見を聞きながら課題解決をしていきたいと思っておりますので、ご協

力をよろしくお願いします。

まずは、全体骨格についてご意見がありましたら出していただきたいと思います。

○白井委員 この基本計画は、僕はずっと計画部会に出ていて計画部会の論理というのは一応よくわかるのですが、市民が読んで、本当に最初の段階からわかるのかなと、市民の目線に立ったときにふと思ったのです。参加する市民の側からと、活動する団体等の側からと最初から分けてあるけれども、市民と団体の分け方とは一体何だろうかと、例えば普通の市民は思うのではないかと一瞬思ったのです。例えば、私は札幌の一市民である、しかし、NPOだったり、JCであったり、町内会であったりという団体の一員だけれども、基本的には一市民として参加しているのだと。そのときに、例えば青年会議所という形で入っていくと、それは団体としてとらえられているけれども、団体になると一市民の顔が見えない。そんな団体のくくりで個人がとらわれていいのかという最初の疑問が、恐らく、市民から出るのではないかと思うのです。

それは、何とかNPOとか、何とか町内会というふうにとられることが、そもそも市民感覚に合わないのではないか。どうしてこれは市民と団体というふうに最初に分けているのだろうとちょっと疑問に思うのですが、いわゆる市民感覚で、例えば、全部、参加活動する市民の側からでいいのではないかと思うのです。何も団体まで書かなくてもいいと思うのです。

例えば、僕は一企業の社員で、企業として参加するのかもしれないけれども、企業で動員されているのではなくて、やはり一個人として共感するから参加するということですね。なぜ市民と団体と分けるのだろうかということがあって、今、僕はJCの一人間として参加するから、団体としてとられるのだろうか、けれども、意識としては一市民として参加しているということがあったら、では、この中のどれなのかというところから疑問がわくのではないかと思うのです。市民レベルにブレークダウンすると、そういう感想を持つのですが、最初から分けるのは何か意味があるのですか。

○河野部会長 事務局に聞きたいところもあるのですけれども、まず、皆さんにご意見を伺っていきたいと思います。

例えば、活動する団体がありきのようなイメージを少し持ってしまうかもしれない。ですから、そこに市民が引っ張られていくような。

○白井委員 そうすると、団体というと、どちらかというと、動員されるとか、この団体で30人お願いとか、そういう意識が団体という言葉に生まれてしまうとしたら、それ自体がまちづくりの基本から外れるのではないかと思っております。なぜ、市民と団体を分ける必要があるのだろうかというふうに最初から思ってしまったのです。

○河野部会長 どうでしょうか。

○横江委員 ちょっと新しい視点ですね。私は、個人でも団体でもやっているのですが、余り違和感はなかったのですが、確かに、言われてみると、初めて取り組んだ人はちょっと違和感があるのかなと思ったのです。ただし、いつも思っているのは、まちづくりとか行政

の施策に参加するときに、行政の職員じゃなくても、あるいは、議員じゃなくても、あるいは、そういう団体の立場になくて、一市民でも、自分たちでみずからいろいろな事業に参画していくと、自分の意見を言えたり、あるいは、まちづくりに参画できるということでは、こういう取り組みは非常に有効性があるなど思っているのです。しかし、個人の力としては非常に弱いと。それが、グループなり、活動団体なり、NPOなり、何らかの組織体になっていくと、より効果的な活動ができるだろうということです。何かの団体に放り込まれて動員をかけられるというのは、いろいろなことを今まで既存の団体がやってきたときに、ありがちなことで、私も清田区民センターで企画をしていますが、人が集まってほしい、任意に集まってほしい、しかし、人数が少なそうなので、ある種、動員と言うとおかしいですけれども、お願いもしてみたいということもあります。これは、そのまちに、身近に、結局、市民スタッフといいますか、いろいろなものに協力してあげようという力が弱く、組織体がないのです。コーディネーターとかいろいろ問題になっていましたけれども、そうした地域の人材を多く発掘、育成して抱えていれば、何かの事業をするときに、多くの方々が賛同し、参加してくれるのかなと思います。それが非常に課題で、そう思っていたところに今の意見があったので、それを聞くと、団体を外してもいいのかなと。

安田委員の三角形を見てみると、ひとりでいくということですね。参画することによって、いろいろな団体にマッチングして、自分が会員になるなり、自分が組織を立ち上げていくなり、やがてそのリーダーになっていくと。そういう図からすれば、あえて分けなくもできるのかなと思います。ただ、それをどういうふうにするのかなと思ったのですが、ただ単に外せばいいだけなのかどうかというのは、まだちょっと整理がつきません。

○菅原委員 私は、一般の方々は何をしたらいいかわからないということがあると思うのです。団塊の世代は、なおのこと、そうなのですけれども、逆に、こういうふうに分けることによって、こういう団体があるから、私の好きどころはどのなのだろうという選ぶ目安も出てくるのかなと思います。それがなくて、全体だけの市民活動のことになると、自分はどこへ行ったらいいかと、逆に大きな模索をしなければならない。ただ、団体があるからこそ、私が向くのはどっちなのだろうという選択ができるのかなと思うのです。

町内会活動はそうなのです。すなわち、一市民なのですけれども、町内会という団体があって、その中に個人が、何もわからない人が入ってきた、そのときに、私はこの部分はやれるなという選択はできると思います。町内会の中で、私は介護とか、子育ての方とか、そういう分け方もできるのかなと思います。それがない場合は、私は何をやったらいいのかということ、それこそ一般の方々は悩むところかと思えます。あることによって選択ができるのかなという利点も含んでいると思うのです。

○河野部会長 ある意味でのモデルが見えてくるということですね。そういう意味では、てっぺんに何を持ってくるかという話なのだろうと思うのですが、今、臼井委員からは、

市民が一番大きなところで、根っここのところで一番大事だということですね。その上で、分け方はさまざま出てくるように思いますが、二つ目のところも、多くの市民によるまちづくり、多種多様な市民まちづくり活動の充実と。そういう意味では、市民と団体と事業の三つで展開されているという構造にもなるので、最初の出だしをどういうふうにとらえていくかということだと思います。

○臼井委員 恐らく、きょうご欠席の安田委員の三角錐の図によると、いわゆる一人一人のビギナー、初心者が市民のような書き方で、もうちょっと継続化していると団体になって、最終的にはトップにリーダーや経営者がいるという図になっているのだけれども、こんな縦構造ではないのではないかと私は思うのです。つまり、あるA子育てサロンであっても、A子育てサロンのいろいろな活動の中で一市民として、この一子育てサロンに自分が入っているけれども、この活動はやりませぬ、この活動は自分は反対しています、この活動は私はどちらとも言えませぬというように、サロンの中にあっても、一個人の価値観のようなものがその団体とはっきり分かれることもあるのです。今は、言ってみれば、緩やかなつながりということの方が、一人一人の価値観みたいなものが、団体の活動とか価値観とは必ずしも一致しないということがみんなはつきりするようになってきたのではないかとこの時代認識なのです。

ですから、活動のリーダーも、自分はこの団体のこの活動にはリーダーとして参加するけれども、同じ団体のこの活動は引いていきたい、つまり外にいたいということもあるかもしれません。そうなると、団体というのは、無人称の集まりみたいなところで区別することが腑に落ちないという感じを持っているので、参加する市民・団体というのか、市民と団体を分けることで、どんどん無人称化していく、顔のない市民のようなものができてるのではないかと思います。

○河野部会長 菅原委員のご意見は、それを逆にとらえて、顔が見えるようにするためにもこういうものが必要なのではないかとこのふうには私はとらえたのです。ただ、臼井委員のように、さまざまな市民がいるということは非常に理解できます。例えば、子育て支援に物すごく興味を持っていても、高齢者に対するボランティアになると、私は全く素人で市民になってしまうわけです。全くリーダーでない状況になってしまうのです。そこで言えば、全くの初心者になってしまうという関係もこの中にあると思うのです。そうすると、最初から分けてとらえてしまうことも、そこで疑問符が生まれてくるなと思います。

岩見副部会長はどうですか。

○岩見副部会長 根っこは、もちろん一人一人の市民ですね。だから、この一人一人の市民が、私の表現を使わせてもらえれば、自分の居場所とか存在感を札幌というまちの中でどう形つくっていくかというのがまちづくりですね。そういう場合に、一つは、どこにも所属しないで、個人としてかかわるということが、この上にある参加する市民と、この表現は別として、そういう形ですね。もう一つは、組織の中での自分の存在感という形で組織にかかわるという流れも当然あるわけです。ですから、この前段に説明が要るかもしれ

ませんけれども、私は、個人という視点と団体という視点は必要なのかなと思ったりしたのです。

○河野部会長　そういう意味では、どう表現していくかということですね。皆さん、言っていることは同じように思うのですが、表現の仕方は、人を考慮する必要があるという意見でよろしいでしょうか。それをどんな形にするかというのは、今、ここで議論する時間がないので、皆さんの意見を、もしいいお考えがありましたら後で出していただければと思います。

そのほか、全体的な骨子のところで何かございませんでしょうか。

私は、例えば基本目標の④の市民と団体がつながるといふふうに市民の側から個人としてあるわけですが、個人と個人がつながって新しい組織をつくっていくということもあるのではないかと思ったのです。この文言だけではちょっと足りないような思いもあったのです。このところではそう思いました。

ほかに何かありませんでしょうか。

○菅原委員　それこそ、わからない市民が集まって一つのものができる場合もあるのではないかと思いますので、この中に何かもう一つ足していただければと思います。団体に普通の市民がくっついたというのではなく、自分たちで新しく立ち上げる場合もあるわけですね。それは、小さいかもしれないし、大きいかもしれないけれども、そういうこともここに文言として一つ入れればいいのかと思っています。

○河野部会長　そこを、だれかが応援できたりということですね。

○臼井委員　全体に、この話の中で流れているトーンとして一つ感じたのは、これだけ、ある種の情報をお持ちの市民がふえ、なおかつ教養もお持ちの市民がふえたときに、全体にいたずらに垣根を低くして身近にするということだけがまちづくりの姿勢としてよろしいのだろうかということは基本の疑問としてあります。ここにも気軽にできるとか、楽しみながらとか、敷居を低くと書いてあるのですけれども、敷居が低いゆえに参加しない人がふえてくるのではないかと思っています。

それは、人材づくりみたいなのところにあつたと思うのですけれども、この前の議論の中で、例えば人材の育成というところが最初にあつたと思いますが、学び合いでも、そういうレベルだったら自分は参画したくないと。よくある郷土を知る、歴史を知るみたいなものでも、圧倒的に、奈良時代の仏教芸術のこういう物すごくレベルの高いことにこれだけの人が集まるとかということが結構出てきているとなると、高い教養を持った人たちに対しては、ある種の深さ、レベルの高さみたいなものが人を引きつけるのだという視点もあつていいのかなと思います。

今、いたずらに、さあ、敷居が低いですよ、やさしいですよ、簡単にできますよという形で、表現は悪いけれども、こびているようなところばかりだと、いらっしやい、いらっしやいばかりで、何か違うアプローチがもう一つあるような気がしてならないのです。この高いレベルまで自分たちは目指している、そこにぽんと入ってくるような意識の高い人

たちが、むしろ、今、まちづくりに、敷居が低いがゆえに、やさしいがゆえに行かないということが、特に団塊の世代にはあるのではないかと思うのです。

それをどういうふうに表示するかはちょっと難しいのですけれども、手を差し伸べるばかりで、実はそうではない。

例えば、ある企業のキャンペーンで、環境にやさしい車をつくるということをして、これまでは価格を安くすれば売れたのですけれども、そんなことではなくて、価格は高いままにしておいて、1台買ったら1万円、こういう環境の助成をする事業に参加できますよ、価格を高く設定して参加できますよと言った方が車が売れる時代なわけです。それだけ高い意識の人たちが出てきているときに、ただ敷居を低くという姿勢で、もちろん敷居を低くすることも必要なのですけれども、敷居をあえて高くして意識の高い人たちが参画するような動きが出てもいいのではないかと思いました。全体に低くし過ぎている感じがあります。

○河野部会長 そうですね。この間の第2回でも、入り口は広くして、多くの方に参加してもらえるような手だてということが話の中心になっていました。要するに、もっと多くの人たちに参加してもらいたいという計画を立てるのがいいのではないかというところに話が行ったのです。それは、とても重要なことであるし、大事なことだと思ったのですが、今の臼井委員のお話ですと、それだけではニーズにこたえられるようなものでないかもしれないということです。

○岩見副部会長 今の話につながるかどうかわかりませんが、僕は、シニアの活動をしていて二つ感じるのです。

一つは、今もエルプラザの地下を通過して市役所まで来たのですが、エルプラザの地下の休むところに、最近、長時間滞留禁止という立て看板が出ているのです。今まさに、高齢者の中には、日々の暮らしの中で行き場がなくて、まち中をさすらっていらっしゃる方が随分多いのです。一つは、そういう方たちに、いわゆるまちづくりというか、それこそ敷居を低くして、何かの形で市民と市民がつながるような、誘導というか、政策というのか、そういうものはすごく必要だと思うのです。これは、かなり低いレベルです。

もう一つの課題として、今、老夫婦とかひとり暮らしが急増してしまっていて、孤独死の問題とかいろいろな課題が出てきているわけです。これも、行政だけでは解決できませんから、我々市民同士がどうやっていくかという問題があります。こうなると、かなり課題意識をきちんと持った人でなければいけないわけです。だから、団塊の世代の中には、私どもも悩んでいるのですけれども、遊びはいいから、もうちょっと何かいいものがないのかという話もちよこちょこ出てきたりするのです。ですから、今の話とつながるかもしれませんが、両輪で必要だなということを僕自身はすごく感じるのです。

ただ、一般的には、遊び系は乗ってくる人が多いけれども、何か義務感を伴うものは今さらということが圧倒的に多くて、ある意味で非常に苦しんでいるところです。

○菅原委員 私どもの中でもそうなのですから、あの中に行くと教養があり過ぎるか

ら、もうやめたという部分もあるのです。やはり、団塊の世代の人たちは、自分たちはそれをやってきている、専門的にやってきている、その中に、そういうふうな人たちが集まると、本当の私たちが言う一般市民の方々がそこに入っていったときに、とてもあそこは教養が高過ぎて、あんなところに行けないということがあるのです。そして、今言われるように、だんだん下がってくる部分があるのかなというところがあるのです。私は、教養がある団体は、教養があるなりにやっていていただければいいと思うのです。これは、個々に自分が選ぶわけですから、敷居を低くして、自分に沿わないと思ったときは、それ以上のレベルのところに行けばいいわけで、それは選択としてあるわけです。表現としては、やはり皆さんに参加していただきたいという表現が大切なことかなと思うのです。とにかく、何でもいいから参加していただく方法をこの中でとっていかないと、まちづくりはなかなかできていかないのではないかと思います。

町内会も同じなのです。とにかく入ってきてくださいと。その中で、自分の意に沿ったら、それを続けてほしいということをお話ししているのです。ただ、余り高いレベルですと、先ほど言ったように、とてもではないけれども、私はあなたに勧められて行ったけれども、とてもではないが、私の意には沿わないということが出てくる部分もあるのです。

○横江委員 多くの方に参加してもらいたいということは、一つ一つの企画であるのです。いい人材もいろいろ来るのですけれども、その次がないのです。その次に活動をつないでいく、あるいは、その人たちが参加できる、活動できる、輝ける場を次に設定していくということです。一番簡単なのは、札幌市や各区でやっているいろいろな公的行事に参画をしてもらい、そのときのお手伝いをしていただく、あるいはスタッフをやらしてもらい、計画部会に入ってもらい。ということで、ここに参加すると、次に自分が協力できる場所とか輝けるステージが待っているというふうになると、その中でさらに上を目指せるのです。

清田区の人材育成講座で勉強会をやりますということで集まってきた人たちは、何も知らずに集まってくるのですけれども、この人はいいものを持っているなという人には、順番に声をかけていって、3カ月後の講師をお願いしますと。講師をやってほしい人集まればいけないのですけれども、たまさか、来て、先輩を見るわけですね。この人も半年前から参加していて、きょう初めてお話ししている。自分も、嫌だったら断っていいのですけれども、自分もそういうステージがあるのだと。あるいは、区でやる区民祭りのボランティア、警備を募集しているから一緒にやらないか、ごみ分別をやるからやらないかというふうに引っ張ってくる。ということで、嫌なら断っていいのですけれども、そういうことをぜひやってみたいという方はつないでいくということをしつづつやれば、いろいろなことに対応できないかなと思って、今、やっています。

○河野部会長 ありがとうございます。

いろいろな意見が出ていたのですけれども、要するに、ボランティア活動に入るときのステップアップの仕方と、どこにアクセスをしていくか、どの領域にアクセスをしていけ

るかという市民の力量というものがあると思うので、その力量に応じて情報が公開されていたり、活動が公開されていると、そこにアクセスしやすくなるということです。自分はどんな立場で、どういう力量でそこに行けるか、本当に初心者でも行けるかと。それから、後の方に話があると思うのですけれども、本当にノウハウも人材も含めていろいろ蓄積された団体もありますね。そういうところに自分がアクセスできるかどうかということも一つあるように思いますし、今の話の流れがそんなふうに行っているかなと思って聞かせていただきました。

ただ、それを文言としてどう表現していけるかとなると、なかなか難しいかなと思ったのですが、本当にレベルアップした人たちがアクセスしやすい条件というのはどんなふうにあるべきかということも一つ検討しなければいけないかもしれません。初心者ばかりの問題ではないということですね。

○横江委員 いろいろお話を聞いていて思ったのですけれども、カラーの一番最初のピンクの二つは、先ほど部会長が言われていましたように、表現の方法を工夫するということが一つ課題かと思います。極端なことを言うと、あえて、これは要らないかなと思います。岩見副部会長からもあったように、前段の説明の文章を入れるとか、事務局の方でその辺を……。

○河野部会長 うまいこと入れていただくということでしょうか。

○横江委員 ちょっとご苦勞をかけるのですけれども、それがうまくいけば、私は、この中身は総じていいような気がします。

○河野部会長 わかりました。

全体的には、今の意見をもとに事務局の方でまた検討していただくということでよろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○河野部会長 それでは、一つずつ、項目別に話をしていきたいと思っておりますので、それぞれが持っているお話がありましたら、ぜひしていただきたいと思っております。

最初に出てきたのは、三つに分かれた中の一つなのですけれども、多くの市民によるまちづくりへの参加から、施策は多くの市民が主体的にまちづくりに参加できる環境づくりとなっております。基本施策がそれにくっついて、この間、私たちが出したものを丸の中でまとめていただいておりますが、これに関して、足りないところとか、ここはもう少し充実した文言でということがありましたら出していただきたいと思っております。

一つ目の多くの市民が主体的にまちづくりに参加できる環境づくりというところについてのご意見をいただきたいと思っておりますが、どうでしょうか。

市民参加が可能になるような、それこそ今の話ではないのですけれども、アクセスも非常に簡単にできるような環境づくりということですね。

情報提供とかPRの支援は必要ではないかという話が出ておりました。

それから、3番目の市民がまちづくりに関心を持つことができる取り組みの実施、その

きっかけ事業といいますか、イメージはどうでしょうか。きっかけの事業というのは、一体どこでどんなふうにやるのかというのは、ほかののかかわりがあるわけです。

○臼井委員 これは極めて個人的な感想なのですが、みんな活動に関心を持つのではないかということがあるわけです。つまり、まちづくりに関心を持ってまちづくりに参加するのではなくて、きっかけというのは、自分の身の回りとかまちに対する関心なのです。それをもっと深めていくと、まちづくりになるということだと思のです。

ですから、③の3)のまちづくりの参加者をふやすためのきっかけ事業としては、まちづくりのおもしろさというふうにとらえるよりは、まちや自分の身近なことへのおもしろさの発見だと思うのです。それに入っていったら、いつの間にかまちづくりに向かっていくと。まちづくりというのは、ステップが三つくらいになっていて、最終段階がまちづくりの活動だと思うのですが、その前に、自分たちの暮らしや身の回りへの関心、おもしろさのようなものがあって、初めてそこに行ってみると、いつの間にかまちづくりのおもしろさになるということで、最初からまちづくりに関心があるのではないのではないかと思うのです。

○河野部会長 本当にそうだと思います。

私も社会教育が専門ですから、公民館などあちこちを歩くのですけれども、旭川でも公民館事業で私のまちを探検しようというテーマで乳幼児を抱えたお母さんやお年寄りがみんな集まってグループを組んで、地図を持って自分のまちを歩くわけです。何がどこにあるということを探検しながら、自分のごみ問題に興味があるのだと、毎日、なぜあんなにごみを散らかしてあるのか、ほかのところはどうなのか見てみたいと。その事業だけではなくて、朝に出向いて行って報告をしたり、そこから自分のまちが見えてくるというか、わかるというか、これではまずいかもねという感覚を自分の中に取り込んでいくと。

そんな活動を旭川の公民館を中心にやっていたのですけれども、非常におもしろいなと思いました。その後サークルなどができて行って、ごみを考える会というようなサークルができて行って、自分の関心事でまちを見つめるように、そして活動が始まる、そんなものがきっかけになっていくのかなと思うのです。

そういう本当にきっかけになるものというのは、今、物すごく大事だというふうに、私も常々、臼井さんのように考えていたところでした。

公民館というのは、そういう意味では非常に取っかかりやすくて、職員もいますのでテーマを打ち出しやすいということがあるのですけれども、そうすると、札幌の場合はどこがやるのか、きっかけの事業は町内会がやるのか、何なのかというふうに思うのですが、ここはとても大事なキーワードになると私は思っているのです。

○岩見副部会長 僕は、この4)と5)ですね。ここにも市民と団体と書いていますけれども、これは先ほど部会長がおっしゃったように、市民と市民とか団体と団体ということになると思うのです。私は前に長野県にいましたので、あそこは公民館活動がすごく活発で、あそこにいる社会教育主事が、そこに来た市民と市民をうまくつなげるとか、組織を

仕掛けるとか、そういうことを物すごくやっているわけです。ところが、札幌を見ますと、公民館は月寒に1カ所しかないし、区民センターとか地区センターがそういう機能を果たしているかという、全く果たしていないですね。ですから、この前に出てきたコーディネーターと申しますか、そういう人と人をつなぐという、そこら辺の機能を、きちんとしたプログラムをつくって、そういう人材を養成して、こういう場でやっていくという形がすごく求められていると思います。

ですから、場の提供はあるのだけれども、結局、そこに来た人と人がつながるかという、全くつながらないのです。ですから、そういう仕掛け方はぜひしてほしいなと感じます。

○菅原委員 大きな話になるけれども、田舎の方に行くと公民館が毎日使われています。札幌市では地区センターで、これは、お金を取られたり、サークルが何かをやっていたりするわけです。私は、今後は、まちづくりセンターが一番の活動の場所だと思っているのです。それを充実させるということだと思います。札幌市は、入れ物はもう要らないよ、つくれないよということになっているけれども、やはり充実させるには、公民館的な役割を持たせるには、まちづくりセンターがその役割を果たすのではないかと考えているのです。

それから、臼井委員が言われたように、確かにそうなのです。何かをやろうとして入る人は、10人いたら1人いるかいらないかなのです。それが、何かきっかけがあるというのは、あなたどうでしょうか、来てくれませんかということで入るのがきっかけなのです。そうすると、その中で、これは私にあっていかなんかということ、1段階、2段階と進んでいくのが普通の人だと思うのです。最初から、私はこれだと言って入る人はまずいないと思うのです。ただ、専門的にやってきた人たちは、私の知っているところでは、今まで園芸の仕事をやってきた人がいるのですが、自然とそこに1人、2人と集まってきて、その人は口も下手だし、余り面倒見のよい人でもないのです。しかし、知らぬ間に何十人と集まって、そういうグループができたのです。そういうものから始まっていくのかなと思います。それは、園芸という教養があって、そこに、私は好きだといって集まってきたグループがある。それが自然的なことなのです。ただ、それを探するのはまた大変なことだと思います。

○河野部会長 そういう意味では、岩見副部会長がおっしゃった4)と5)のサロンの場というのは、日常に置かれていくことで、そこに行ったら、何か情報が得られたり、そこに行く人と人がいたり、ガーデニングをやりたいなと思ったら、こういう人がいるよということが情報として流れていくと、そこで結びついていくような場になるのでしょうか。そこら辺の充実はすごく大事ですね。今のまちづくりセンターの充実ということも含めて考えていければと思います。

○岩見副部会長 特に、札幌は移動人口が物すごく多いでしょう。ですから、移動人口が多くて、移ってきてだれか友達が欲しいというときに、どうしていいかわからないのです。

そのときにまちづくりセンターに行くかといったら、多分、行かないのです。むしろ、サロンのなところの方が行きやすいのです。そういう方が気軽に出会いとか交流を起こせるような場所とか機会をどうつくるのかと。

最近、札幌を見ている、大きなイベントはいっぱいやっています。やたらとイベント、イベントでね。そのときに、ばっと人は集まるけれども、あれが終わったら、終わりなのです。そこがきっかけで交流が芽生えるというところまで行っていないのです。ですから、もうちょっと地区に根差した形で工夫する必要があるなと思うのです。

○河野部会長 市民と市民がつながるといところが少し見えてきたように思います。

あとは、団塊の世代の人たちをどういうふうに取り込んでいくのかということと関連するわけですが、やはり、団塊の世代の人たちは、私もそうですが、退職したらというふうに思っているのでしょうか。

○岩見副会長 まだ仕事をしていますよ。

○河野部会長 そうですね。今は65歳くらいまではやっていますね。

○岩見副会長 私も、団塊の世代にいろいろな仕掛けをしているけれども、乗ってこないですね。仕掛け方が下手なのだろうな。

男性は昼間に仕事をしています。

○菅原委員 そうですね。65歳になって、ようやくという感じですね。

○横江委員 人材育成でやっているのですけれども、例えば、保護司さんはたしか65歳までなのです。いい人材がたくさん来て、いいなと思ったら、みんな65歳を超えているのです。でも、そういうふうには見えないのです。元気でお若いですからね。ですから、60代はまだ現役で皆さんいろいろなことをやられています。

○岩見副会長 あとは、よく言われるのは、もう人間関係は辟易しています、もういいですと。

○河野部会長 もう疲れ果ててね。

○岩見副会長 好きに、趣味に生きたいですと。

○河野部会長 この間、東京の三多摩地区の公民館の職員から聞いたのですけれども、今、公民館が非常に荒れていると言うのです。なぜかというと、東京では、団塊の世代の男性たちが公民館にいっぱい流れて、公民館の回りをうろうろしていて、何をやりたいかは全然定まらなくて、入りたいけれども、入れないと。そういう人たちを呼び込みながら声をかけて、一たん門をくぐると非常に元気になるのだけれども、それまでは女性が中心になって公民館の活動が動いてきたので、その流れに男性がなかなか乗り切れないのですね。というのは、スピード社会で生きてきているので、女性たちが会議をしても、まどろっこしくて、どんどんリーダーシップを発揮してしまって、亀裂が生じてしまうのです。そこに職員が仲介で入りながら、まずは男性社会をとってもらうことから始めないとダメなのかと、盛んに悩みを話していました。

本当に疲れ果ててどうしようもなく、人間関係の中に入りたくないという人もいると

思うのですけれども、やってみたいな、自分のノウハウを少し生かしてみたいなという人たちがどうやって取り込んでいけるかというのは大きいかもしれませんね。その層は人口的には非常に大きいわけですからね。突然というのはなかなか難しいかもしれませんが、いいアイデアをみんなで持ち寄りながらやっていけたらいいかなと思います。

今、一つの塊で考えると、環境づくりというところでは、居場所の問題、事業の問題、事業への持っていき方というところが話題になりましたが、そんなことでよろしいですか。

ほかに何かご意見などはありませんか。

なければ、二つ目のところに行きたいと思いますが、よろしいですか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○河野部会長 それでは、二つ目のところですが、自立的な市民まちづくり活動の広がりへの促進です。

今回は、二つ目の活動主体の種類・活動段階に応じた育成支援と。そういうところでは、人材育成プログラムの開発ということで、ここもある意味では初心者向け、あるいは、もうちょっとレベルの高い人たちを呼び込むようなプログラムの開発も必要ではないかという意見が出たような記憶があります。

それから、1番目のところは、総合的な情報発信とか公共・民間施設の有効活用、さぼりとほっと基金のメニューの多様化、この辺は事務局側でつけ加えていただいたところですので、そこら辺も含めて委員の皆さん方のご意見を伺えればというふうに思います。

あとは、企業の社会貢献がありますので、ここは臼井委員に聞きたいなと思っておりますが、それぞれの立場でご意見をいただければと思います。

人材育成というところについて、どうでしょうか。

札幌市は、エルプラザの男女共同参画センターも、市民活動センターも、常に人材育成のテーマを掲げて研修をされていると思います。私も何度かそこにお邪魔したことがあります。結構たくさんの方が養成事業の中に参加しているように思っていますけれども、それは自分たちで自立した形でまちづくりの事業を展開していくのに必要ということですね。

私は、臼井委員に、三つ目にあります企業の社会貢献活動を今の企業はどんなふうには押しえられているのかということをお聞きしたかったです。

○臼井委員 企業の社会貢献活動といいますと、いわゆる今のトレンドに沿ったものを企業は一般的にやりたがるのです。ですから、ブラジルの熱帯雨林で伐採されるその植林であったり、マングローブの林をつくったり、オーストラリアのユーカラの木を植えたり、中国の万里の長城というふうに、言ってみれば、全部、大企業を中心にして活動の主体が向こうなのです。非常に身近ではないのです。国際的な視点です。つまり、地球環境というところで言うと、今はそういうことが大変トレンドであるということでそういう流れになっているのだけれども、地域の企業というのは、その地域に対して、まちの安全ネットワークをつくるか、その地域、地域によって安心して住めるような取り組みを企業の側からするという事だと思っております。

今、時々ありますね。新聞販売店だと、新聞を配達している間に何か危険なことはないかということで見て回るような運動をしたりということだと、企業というのは、本来、社会貢献活動というと、物すごく大きくとらえて、すぐにブラジルとか、やれマングローブの林だということに行くのではなくて、そろそろ、社会貢献活動というのは、その地域、地域で自分たちでお世話になっている、あるいは、自分たちが活動しているその地域で何が求められているのか、その足元の中での活動というものが本当に求められていると思うのです。その視点が今は余りないのです。

これは、恐らく、東京に本社がある企業だと、どうしても、そういった決定権も東京にあって、支社とか支店のことは余りわからないのです。そして、言ってみれば、そのヘッドクォーターが決めて、やれ万里の長城だという話になってしまうのですが、北は北海道から南は九州、沖縄までいろいろなところで営業活動をしているわけですから、本来はその活動をしているその場、その場で社会貢献をしていくということがまさに必要なのでしょうね。そのための、中央集権型ではない意思決定、もっと地域の各支社、支店も含めた声の吸い上げであったり、その地域、地域でやっていくという姿勢が本来は必要なのです。ここが僕らは課題だと思っています。たまたま我が社は幾つかの地域に分社化したので、そういう中で貢献していくことがやっとならざるようになっていきます。その辺は、むしろ海外の企業の方が、自分たちがちゃんと活動している地域に対する貢献みたいな目線を持っています。

恐らく、企業といっても、いろいろな社会貢献活動ができる企業は、ある程度、余裕のある企業になりますし、そういう点で言うと、その多くは東京に本社がある企業で、それは中央集権型の構造がどうしてもあります。それをもっともっと地域に分散していくような活動、ないしは価値観づくりのようなことは、本当に企業の中でも、あるいは、市民からもそのような声が上がるといいなと思います。いつまでも万里の長城ではないですよ。企業の活動というと、万里の長城が映っていると、ぱん見えるじゃないですか。でも、それって違うよなというところを伝えていかなければいけないですね。

○河野部会長 ありがとうございます。

例えば、今、新聞配達の話が出ましたけれども、小さな地域に行くと、本当に郵便局の配達の人が声をかけて、そこで安全確認というか、高齢者の状況などを把握して民生委員につながるとか、そういうシステムがつくられたりしています。札幌でも、コンビニだったでしょうか、虐待で逃げ込んで、その通報からその状況が見えたとか、昔で言えば、商店街がいろいろな仲裁に入ったり、いろいろなことを解決できたりする力量があったのですが、今はそこがなかなかない中で、ある意味では、24時間体制のコンビニというのも地域にとっては物すごく大事な存在ですね。消費文化だけではなくて、いろいろな地域の状況を知ったり、情報を得たりということではすごく大事な存在になります。

そんなことも含めて、単にグローバル化していくような視点ではない地域目線といいますか、そこでの企業の貢献のようなものを市民の側からもう少し発していく必要があると、

今のお話を聞きながら思いました。

○臼井委員 これは道内のあるまちでやっているプロパンガスの販売店のネットワークなのですけれども、プロパンガスというのは、2カ月に一遍なり交換しますね。そのときに、必ず一声かけるのです。今、何か困っていることはありませんかということを見ると、いろいろな声が出るのです。そして、できる限り、協力できるものはやっ払いこうと。そういう運動をしている方と私はたまたま知り合いなのです。そうすると、やれ電球が切れたとか、ちょっとプロパンバスの重いものよりこの缶を動かす方が軽いからやってくれないかということがあると、かえって、それでお客様がふえていくと言うのです。ですから、何も大企業ではなくても、各地域の営業活動をしているような、たとえ零細な企業であっても、できることから地域に対して、貢献活動と言うと大げさですが、役立っていくと。そういうようなことは、札幌でもやれると思うのです。何も大企業じゃなくても、ゆとりがある企業じゃなくても、それがやっ払いいくことで、結果的に自分たちのビジネスやお客様をふやしていけるのだということはあると思います。そのあたりはかなり重要ななと思っています。

○岩見副部長 今、シーズネットで、一つは、国の事業で、東京のさわやか福祉財団とタイアップしてやっているのですが、ボランティア休暇をとって社会貢献をしましょうというキャンペーンを張って、10月2日と3日で、五つくらいのプログラムをつくりまして、ここに社員の方はご参加くださいと。特に、CSRに熱心な企業に案内を出して、今、募集をかけている真っ最中なのですが、正直に言って、すごく反応が弱いのです。

○横江委員 先日、道新に載っていましたね。

○岩見副部長 むしろ、企業ではない方からの申し込みはあるのですが、企業からの申し込みはない。ですから、そこまでの成熟というのは非常に難しいのかなという感じがするのです。

そういう意味から言うと、臼井委員がおっしゃったように、例えば新聞販売店の安否確認とか、そういう企業活動と社会貢献をつなぐような仕組みをタイアップしてやる方が生かしやすいなと感じます。

○河野部長 恐らく、今までいろいろ聞いた中でも、そんな感じがしますね。それは、市民の側からも言っていないと、こういうことをお願いできませんでしょうかという協働がきっと必要なのでしょうね。いつまでも待っているわけではなくてね。そういうような発想がお互いにできればいいですね。

○菅原委員 ただ、企業の中でも、社会貢献の名前だけは掲げているけれども、その内容がわからないところが結構あるのです。スーパーは特にそうです。私は全然わかりませんが、上の方はわかっていると思いますけれどもとって、店長も何もわからないと。そういう教育も必要なのだろうなと思っています。

○河野部長 本当にそうですね。職員研修のような、お互いにそこが高まるような。

○菅原委員 それが必要だなと思っているのです。

○河野部会長 それは、本当に大事なことですね。

私の関心事から企業の話に行ってしまったけれども、ほかのところはどうでしょうか。

リーダー養成のプログラムというのは、社会教育というのはすごく進んでいるわけですが、コーディネーター養成のプログラムというのは、全然確立されていないと思います。ほとんどない状況だと思います。

○岩見副部会長 今の札幌を見ていたら、明らかに縦型社会から横型社会に変わってきています。やはり、横型社会というのは、肩書きがきかない社会ですから、やはり、上手な形でのコーディネートですね。そのような形でまちづくりの仕掛けというか、何かと何かをつなぐようなね。ですから、これはぜひ、プログラムをきちんとつくってもらおうとか、ありあわせではなくてね。プログラムをきちんとつくって、この人材を長期的に養成していくとか、それが結果的に新しい地域リーダーになると思うのです。昔のボス的な存在ではなくて、新しい地域リーダーという形になっていくのかなという期待感は大いいのですけれどもね。

○河野部会長 本当にそうだと思うのですけれども、そこはなかなか難しいところですね。

○岩見副部会長 僕は、シニア層をやっていると、正直に言って、今の市民と市民のつき合方はすごく下手というか、わからないというか……。

○菅原委員 結構プライドを持っている人が多いですからね。

○河野部会長 それは、札幌発信型のプログラムができると非常にいいなと思っております。そういうものをつくるプロジェクトチームを形成して、検討を重ねていくということも一つの事業としてあるのではないかと思います。

総合的な情報発信、公共・民間施設の有効活用、さぼ一とほっと基金とあります。3番目のさぼ一とほっと基金のメニューの多様化というのは、新しいボランティアを育てたり、市民のまちづくり活動を広げていく一つになるのではないかと思います。ちょっとわかりづらいところもありますが、これは上のところとまた違ったニュアンスになりますか。

○事務局（大瀬係長） どっちかという、上の方は、一般市民向けといいますか、これから参加に行きますよという情報提供です。下の方は、活動されている方とか、発展、充実ためのということです。

○臼井委員 恐らく、この情報発信というのは、札幌市とか団体がやり合うのではなくて、参加している人たち自身の情報の自由発信なのだと思うのです。だから、こんな活動をしていますよではなくて、こういう活動をしていたら、こういうことを感じたとか、この人に呼びかけてみようということも含めた、さっきの横型ではないけれども、それはネット型なのか、恐らく、タイムリーな活動そのものがリアルタイムでやっていって、自分たちで解決していったり、あるいは、ほかの団体に問いかけたり、情報をやり合ったりというような、いわゆる自由発信なのではないかというふうに思っています。

○河野部会長 そういう意味では、その情報をもとにしながら、それぞれの団体が力量を

アップしていく、活動が豊かになっていったり、ある意味では、もしかしたら手を結び合
いながら二つの団体、三つの団体が一つの共同事業をするというふうに発展していけば、
もうちょっと豊かに展開していくと。

○臼井委員 それ相応の自由発信をしていきながら、そこに関心のある市民を巻き込んで
いくという流れになっていくと思います。

○河野部会長 もう一つ、その下に活動団体に対する公共民間施設の有効活用というふう
にあります。現状としては、札幌市内でまちづくりやさまざまなボランティア活動とい
うのは、ボランティアセンター、市民活動サポートセンターでしょうか。区民センターと
か地区センター、あるいは町内会も含めてということになるのでしょうかけれどもね。

有効活用というのは、具体的にどんなことが考えられるのかと思うのですが、下の方の
サロンとのかかわりもあるのではないかと思います。

○臼井委員 恐らく、そういった場とか施設が使いにくかったり、近くにないということ
があります。例えば、私は豊平区の西岡に住んでいるのですがけれども、町内会で集まっ
たりするのを、余りあの辺にはないのか、結局は喫茶店とか居酒屋でやっている場合が多い
わけですね。となると、もうちょっとやわらかな使われ方ができる、あるいは個人の家でや
っていたりするということになると、それは決して悪いことではないと思うのですが、そ
ういう場に対しての支援と言うと変ですが、あるいは、アメンバー的にさまざまなところ
が活動の場になっていくようなつくり方ですね。

一番いいのは、最終的には行政に頼らないで、すぐに個人が自分の部屋はいいよという
形になっていくのが一番理想系なのでしょうけれども、一気にそこまではいかないとい
う中でも、これは非常に難しいのだけれども、思い立ったらすぐに集まれるような場です
ね。何かの集まりをしようと思って、それをこれから2時間後にしようとしたら、それは1
か月前から押さえられていたみたいなどころがあったりするんで、とってもタイムリーに、
しかもスピーディーにできるということです。

恐らく、いろいろな団体であって、今ある団体や活動と現役世代が、先ほど団塊の世代
という話がありましたが、そこで極めてバリアになっているのは、さっき男社会はスピー
ディーと言っていましたけれども、やはり、今の社会にいる人は、これはおもしろいねと
いったら、じゃ、どこかにすぐ集まろうという極めてスピーディーなことがないと、また
この後2週間後か、遅くてやってられないよという話になると思うのです。ですから、
そこでもう少し、すぐにやわらかく対応できるような場が、何かうまく活用がないかなと
思います。

○岩見副部会長 時々、我々も現場でこれに絡んで出てくるのは、何かイベントをしたい
ときに会場探しは物すごく困るのです。ですから、こういうものを一元的に、何かで見たら、
ここはあいているとか、一元管理の仕組みがないのかなと思うのです。こういうのは、
本当は行政でやってもらいたいのですけれどもね。

○臼井委員 また窓口が違うとかね。

○岩見副部長 非常に困るのです。

○河野部長 1日かかりますね。

○菅原委員 ぽんと押せばすぐに出てくるようなものですね。

○岩見副部長 主だったところの会館とか、空き情報とか、3カ月くらい先まで出ているとか、そういうものがあつたらすごく助かります。

○菅原委員 グラウンドもそうなのです。子どもたちが何かやりたいといっても、とられて、全然あいていないのです。ところが、その日になったらあいているとか、そんなことがすごくあるのです。ですから、そういう情報が、ぽんと押せばすぐに出てくる、あそこがあいている、じゃ、あそこに行こうという部分もあつていいのかなと思います。今言われているとおりでと思います。

○河野部長 思い立ったらすぐに集まれるような場ですね。それをサロンと言ってもいいわけですけどもね。

○菅原委員 たまたま、私どものところは町内の役員に喫茶店をしている者がいるものですから、即です。きょう集まるよといったら、そこはすっかり貸切して、そこに集まります。ですから、ほとんどそこを利用して、コーヒーを飲みながら会議を開くと。そういうところがあるというのは、すごく大切だし、ありがたいなと思っています。

○河野部長 ぜひ、そういう場所が欲しいですね。

○菅原委員 小さな団体は、みんなそこです。会館を利用するよりも、そこがいいと、コーヒー代だけで済むと。そういう場があるというのはありがたいと思っています。

○河野部長 そういう空間といいますか、余り大きくなくてもいいから、みんながちょっとしたときにぱっと集まれるところですね。

例えば、エルプラザの3階とか4階の空間は、本当に小さなグループが常にいっぱいいます。ああいう場所があると、とてもいいですね。なかなか身近にそういうところがないので、喫茶店などを使うしかないのです。

○菅原委員 提供してくれるところがなかなかないのです。

○河野部長 そこを充実して、いつ行ってもそこに情報があるというのはいいなと思います。

二つ目の自立的な市民まちづくり活動の広がり促進というところについて、いろいろ話が出まして、あちこち行きましたけれども、よろしいですか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○河野部長 では、三つ目ですが、まちづくりを行うさまざまな主体の連携促進です。

ここでも、私たちが意見として出したのは下の二つの項目ではあつたのですが、一番上のところは、まだまだということで黄色い枠でくくられています。ここも含めてご意見がありましたらお願いします。

今までの話とかなり重なっているところがありますけれども、もしございましたら、お願いできればと思います。

菅原委員は、地域の中で、町内会も含めていろいろな団体をつなげたり、そういう意味ではネットワークをつくって活動をしておられますが、連携というところのご経験がありましたらお話しいただきたいと思います。

○菅原委員 今までは、どうしても縦なのです。入る余地がないというところで、そこは私たちはあなた方をお願いしますと言ってやったのではないという団体もあるわけです。極端に言うと、交通部門とか、地域安全推進員というのは、全然別個な組織の感覚で皆さんがいたのです。それが今、ようやく一本になったのです。それには、常に顔を合わせていくということが大切です。ようやく一本化されて、いろいろなところで常に会合を開いています。防犯の部分はそうなのです。防犯というのは全部に当てはまるのです。町内も当てはまるし、PTAも当てはまるし、補導員も当てはまるし、全部なのです。ですから、防犯の何かの会議を開くとなったら、全部集まるようになったのです。それが、ここ3年間やってきたことの成果だと思っています。今までは、それが一つずつ活動していたのです。あなた方はいいですよ、私たちはこっちでやっているからというところがすごく多かったのですが、それがようやく一本化されたのです。これは、どこの町内でもそうだと思うのです。豊平にしろ、どこにしろ、まだ一本化していないところがほとんどです。保護司というのは一切わからなかったのです。皆さんもわからないと思います。自分の連町の中で保護司なんてだれがやっているかわからない。それが、今は、保護司の方から、私たちも入れてくださいというふうになってきました。民生委員もわかりませんでした。その方々も全部入るようになったのです。私たちのところにはまちづくり委員会というものがあるものだから、その中に全部を突っ込んでしまったのです。全部です。諸団体の一つのものに入れてしまったのです。その中で部会をつくってやっていっています。これは、成功した例だと思っています。

ですから、いかにして一つのものにするか、縦ではなくて、横も縦も斜めも全部その中に入るような方法をとっていくような、3年かかりましたけれども、ようやくそういう組織になってきました。それは、それぞれの組織が物すごくプライドを持っているのです。おれは青少年の育成だとか、おれは防犯だとか、ところが、全部をまとめて話をさせると、けんけんごうごうの話になるのです、目的は一つなのに。それが、逆にいい方向に向くのです。いろいろなものが出てきますからね。そうすると、これではだめだという意識を皆さん持ってくれるのです。それが今までは一つもなかったものだから、きょうは何をしますから、1週間後にこんなことをしますからと言っても、それは私たちの管轄ではないというようなことがあったのですが、今はほとんど垣根がなくなりました。それは一番大切なことではないかと思っています。

やはり、まちづくり委員会というものを別につくったということがよかったですね。これは、連町がお願いしたとか、町内がお願いしたといっても、ほとんど反応がないのです。ところが、企業も入り、何も入りというまちづくり委員会という組織の中に全部を突っ込んで、そこでやらなければいけないという意識を持ってくれたのです。この間、ようやく

P T Aも立ち上がって、子どもを守るためには自分たちで活動しなければならないといって、全部、腕章をつけてやったという小学校もあるのです。それは、皆さんに呼びかけた部分だなと思っています。

このまちづくりの中に入れてもらうには、私たちの活動が一番身近だと思うのです。町内の活動ですね。今、子育てのサロンがあるのですが、サロンの中にお母さんたちが子どもを連れてきて、その中でまた一つのグループができたのです。お母さんたちがグループをつくって連携しているところもあるのです、地域によっては。それが大切だなと思っています。そのきっかけをつくってあげるのが私たちの役目かなと思っています。

○河野部会長 活動というのは、それぞれあるわけですが、使命を持って活動していると思うのですが、横につながるといふか、その意味といふか、つながればいいことがあるといふことが実感できるのはどのような場面ですか。

○菅原委員 今、私たちが物すごく実感しているのは、青少年育成のところは子どものことをやっているわけですがけれども、一般の人はわからないわけですが、それが、その人たちのこういう悩みがあるのですよという話を聞くと、それは民生委員ともつながるなど。民生委員の方から言うと、守秘義務があるとか、何があるといふことがあるのです。その部分は、私たちの防犯の方でやれるなどか、そういうふうにつながってくるのです。必ずつながるのです。

○河野部会長 今のはすごく大事な視点だと思います。それぞれ活動しているところ、それなりに自負を持って活動しているわけですがけれども、どっちかといふと、自分の活動だけが完結すればいいと思っていますね。全体の総枠のつながりがなくて、地域の中でつながろうなどと言いながらも、そこはなかなかできないのです。だから、結局、活動そのものもある意味で特化して専門的にならざるを得ないのですけれども、課題を解決していくためには、そうではない人たちがつながっていくことで、自分たちがやっていることも見えるし、ほかの人たちのことも見えてくるといふことがあるのではないかと思います。

○岩見副部会長 これは、言葉で見るとつながり方が三つくらいあるのです。交流といふつながりと、連携といふつながりと、協働といふつながりで、だんだんと深まっていくような感じですね。これは、先ほどと同じで、コーディネーターをどうするのかといふことが、個人以上に大変といふか、難しいですね。それと同時に、拠点をどうするかという課題ですね。ですから、これは物すごく難しいですね。正直に言って、なかなかうまくいかないといふのは、そこら辺の課題があるのだと思います。もちろん、ミッションの違いとか、アイデア、価値観の違いとか、いろいろな違いはあるのでしょうけれども、そこら辺の基本的な課題はきちんとしていかないと、つながるのはなかなか難しいのかなといふ気がします。

○河野部会長 つながったところから形骸化していくということも、団体の中でよく出てくることです。要するに、マンネリ化するといひますか、結果として、余りいい方向が得られないということもきっとあると思います。

横江委員は、NPOなどでいろいろやられています、そういうところでの連携と申しますか、現状も含めてどんなふうに考えますか。

○横江委員 菅原委員の話は、基本的にはこれがいいと思っているのです。それぞれの団体がそれぞれにいろいろな活動をしています。勉強会でも、講演会でも、研修会でも、実技指導でも、そういうものが個々に情報を発信しているということがあるのです。例えば、10の団体がつながって一緒にやっている。そうすると、一つ一つの行事をやっていれば10の行事があり、それに総合参加をするということ。あるいは、毎月、どこかの団体で何かの企画があると。そういうところに、その主体となる団体とプラスして、どこかが、今月、私たちが年に1回、この団体に、協賛ではないですけども、お手伝いをする。そのように、自分たちが年に1回主催する、年に1回協力する、そんなことで協力していくと、ここにつながって参画していると自分たちの活動自体も活性化できる。あるいは、区でも、毎月、いろいろな課で企画を行っている、市でもやっている、9月27日にもやるし、10月5日もやると。9月27日は中央区さんがつながった組織体がお手伝いしてください、10月5日は清田区さんですよというふうに、少しずつ、何かを新たに立ち上げるのではなくて、あるものをつないでいく。ということになると、ある種、責任とやりがいが出てくるのです。そういうことができないかなということ。なかなか難しいと思いますけれども、それが課題かなと思います。

それから、前から思っていたのですが、いろいろな手当てについては、交通費は、原則、ウィズユーカードということをお願いしたい。地下鉄に乗ろう何とかキャンペーン、札幌市の手当てはウィズユーカードですということがあってもいいと思います。

○河野部会長 岩見副部会長は、コーディネーターをNPOの中でどんなふうにつくり上げているのでしょうか。

○岩見副部会長 僕は、具体的に、小地域の中で福祉的に地域ケアシステムをどうするかということで、民生委員さんとか、介護保険事業所とか、ケアマネジャーが入って、何か課題があったらどういう形でやるかということ。を地区単位で厚別を中心にやり始めているのです。ですから、今はまだ交流かな、とにかく関係者が集まって、一つのテーブルでお互いの立場を理解するという。ワークショップ的な感じでちょっと動き始めています。

○河野部会長 そこからどういうふうに行くかということですね。

○岩見副部会長 問題はそれです。今までは、行政が主導権を持ってしまおうというか、今は社会福祉協議会か行政ですね。本来なら、市民がどこかでうまくコミットできればいいのですが、今、そこら辺は試行錯誤段階です。

○河野部会長 NPOの地域での役割と申しますか、自分たちの活動は充実したものになると申しますけれども、地域の人たちをコーディネートしていくところまでは……。

○岩見副部会長 特に、老夫婦とかひとり暮らしで余り交流のない人をどう引っ張り出すとか、そこでいろいろな課題があったときに介護保険とどうつなげるとか、そういうこ

とはいっぱいあります。ですから、片方でニーズを拾うということと、片方でさまざまな立場の人がそこにどうかかわっていくかということをやっていくのですが、具体的にやるには、もう少し緻密な機能分担という形はきちんとやっていく必要があるのかなという感じがしています。

○河野部会長 そういう経験からも、このまちづくりは学んでいかなければいけないと思うのです。精神的にいろいろな実践経験があるわけですから、そういうノウハウも学びながら地域でコーディネートしていくような役割といいますか、連携を促進していくという意味ではすごく必要なところだと思います。そういう意味では、まだ試されているということですね。

○岩見副部会長 特に、要介護の場合は、今は全部、在宅、在宅と言うわけでしょう。では、在宅で家族がいないのにどうやっていくかといったら、とにかく連携しかないのですよ。地域のさまざまな機関がそこにどうかかわるか。そこら辺をもうちょっと緻密にきちんとやっていく形でやらないと、大づかみではなかなか難しいです。

○河野部会長 そういう意味では、そこで企業とも連携できるようになるシステムになりますね。例えば、介護関係の……。

○岩見副部会長 介護保険の事業所とかね。

○河野部会長 そういう意味では、まだまだ練られていかなければいけないし、成熟していくようなプロセスが片方では必要なのだということが連携のためにはすごく大事な側面としてあるのかなと思いつつ、まちづくりという一つのカテゴリーの中でそれが試されていくと、札幌らしい協働のあり方とか連携のあり方が生まれてくるのかなと思っています。

それにしても、先ほどの岩見副部会長の話ではないですが、交流から連携協働に、ある意味で目的が高く上っていく、中身も進化していくというふうになると、そこに繋げていく大事な人と、それから、ある意味での場所というものが必要になってくるのは必然的なことだと思います。ぜひ、そこら辺では、基本施策が実施に移される場所ですから、非常に重要な施策になるのではないかと、今、話を伺いながら思いました。

それが三つ目のところですが、連携促進のところは大体よろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○河野部会長 では、最後ですが、計画の推進に当たりというところは、この間は市民と職員と一緒に学び合う場が必要であり、単なる行政の説明というよりも、まちづくりをどうするかという対等の立場で学習し合うというところもすごく大事なのではないかという話が出ました。基本的には、ここは行政の領域になって、私たちにはなかなか見えないところもあるわけです。これと似たようなことでもいいのですが、ご意見などがありましたら、ぜひ上げていただきたいと思います。

○臼井委員 計画の推進に当たりというのは、行政だけなのかなという感じがするのです。例えば、そこで自発的なまちづくりをする人たち、リーダー的な人たちも含めて、市民参画のような形で、時には一緒にオブザーブしていくとか、何かないのかなというふうに思

いました。これを行政だけでしていったら、まちづくりではなくなるような感覚をふと抱いたのです。それは、この委員会ではないような、あるような、よくわかりませんが、そんな仕組みがあってもいいのかなと思います。

○河野部会長 延長線上にはちょっと考えられることで、それを具体化する際の委員会のようなものですね。意見を述べ合うような場があればいいということですね。それは必要かもしれませんね。必要なんでしょうね。

私は、事務局サイドのというふうにとらえてしまったのですけれども、そうではなくて、計画を推進していくと。

○臼井委員 直感ですけども、特に進行管理や検証というあたりは市民の側の目があったもいいような感じがしました。

○河野部会長 推進に当たってということになると、そうですね。

ここは、事務局サイドのことと、推進をしていく体制の問題は離してとらえた方がいいですね。

○事務局（大瀬係長） 市民の視点からの検証ということですけども、一つは、この促進テーブルの計画部会が、基本計画策定後には事業検討部会という形に衣がえしますので、一つは、その中で計画の進行管理とか検証などをやっていただく考えはございます。それが、市民からの目線での評価というか検証の一つの仕組みになるのかなと考えております。

○河野部会長 というご説明がありました。事業検討部会で検証し、ある意味で市民の声もそこに反映していくということですから、そのところは見えてきました。

大体よろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○河野部会長 司会が悪くて、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりで申しわけなかったのですけれども、とりあえず、最初の基本計画の骨格から始まって細部に至るまで、さまざまな意見が出されたように思います。時間も大分使いましたので、非常に充実したようなものになったと思います。前回よりも頭がすっきり整理されて話ができたと感じています。

そろそろ時間ですので終わりにしたいのですけれども、皆さんの方から何かございましたら、ぜひご意見などを出していただきたいと思います。なければ、終わりにしたいと思います。いかがですか。

（「なし」と発言する者あり）

○河野部会長 それでは、骨格（案）の議論はここで終わりにしたいと思います。

事務局の方から連絡事項はありますか。

○事務局（大瀬係長） 本日は、どうもありがとうございました。

本日いただいた意見をもとにしまして、次回は10月中旬になりますけれども、計画部会の場で、今度は答申に向けての素案を提示させていただきまして、またご議論をいただきたいと思っております。非常にタイトな日程の中で無理をお願いすることもあるかと思

いますけれども、何とぞ、よろしくお願ひしたいと思ひます。

3. 閉 会

○河野部会長 きょうは、たくさんの意見をいただきまして、本当に感謝しております。
ありがとうございました。

以 上→